

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第146回演奏会

The New Symphony Orchestra The 146th Concert

指揮: フランシス・トラヴィス

Francis TRAVIS, conductor



BEETHOVEN

ベートーヴェン

交響曲第2番ニ長調

Ludwig van BEETHOVEN (1770-1827): Symphony No.2 in D major Op.36, 1802

DEBUSSY

ドビュッシー

海—3つの交響的素描

Claude Achille DEBUSSY (1862-1918): La mer—Trois esquisses symphoniques, 1905

FALLA

ファリャ

舞踊音楽「三角帽子」(全曲)

Manuel de FALLA (1876-1946): El Sombrero de tres picos, 1915

メゾソプラノ独唱: 福田玲子

FUKUDA Reiko, mezzo soprano

1995年1月16日(月・振休) 2:00pm.

Monday, January 16, 1995 at Tokyo Geijutsu Gekijo (Ikebukuro Sta. West Exit)

東京芸術劇場 (池袋駅西口)

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第146回演奏会

The New Symphony Orchestra The 146th Concert



指揮：フランシス・トラヴィス

Francis TRAVIS, Conductor

ベートーヴェン：交響曲第2番 ニ長調

Ludwig van BEETHOVEN: Symphony No.2 in D major Op.36, 1802

I. *Adagio molto - Allegro con brio*

II. *Larghetto*

III. *Scherzo (Allegro)*

IV. *Allegro molto*

ドビュッシー：海 - 3つの交響的素描

Claude Achille DEBUSSY: La mer - Trois esquisses symphoniques, 1905

I. *De l'aube à midi sur la mer* 海の夜明けから真昼まで

II. *Jeux de vagues* 波の戯れ

III. *Dialogue du vent et de la mer* 風と海との対話

——— 休 憩 ———

ファリャ：舞踊音楽「三角帽子」(全曲)

Manuel de FALLA: El Sombrero de tres picos, 1915

INTRODUCTION

PART ONE

Afternoon 午後

Dance of the Miller's Wife 粉屋の女房の踊り(ファンダンゴ)

PART TWO

The Neighbours' Dance (Seguidillas) 近所の人たちの踊り(セギディリア)

The Miller's Dance (Farruca) 粉屋の踊り(ファルーカ)

Final Dance (Jota) 終幕の踊り(ホタ)

メゾソプラノ独唱：福田 玲子

FUKUDA Reiko, mezzo soprano

1995年1月16日(月・振替休日) 2:00p.m.

東京芸術劇場

主催：新交響楽団

* チラシにベートーヴェン交響曲第2番の作曲年が「1800年」とあるのは、「1802年」の誤りです。

●指揮

フランシス・トラヴィス

Francis TRAVIS, conductor



1921年米国デトロイト生まれ（69年スイスに帰化）。ウェイン大学、ミシガン州立大学、同大学院をそれぞれ卒業・修了。48年よりヘルマン・シエルヘンに指揮法を学び、チューリヒ大学ではヒンデミットの下で音楽博士号を取得した。以後は指揮者としてドイツ、イタリア、オランダ、ベルギー、スカンディナヴィア3国を中心に国際的な活動を行う。

ベルリン芸術週間、ルツェルン音楽祭をはじめとするヨーロッパ各地の音楽祭にも数多く出演して好評を博す。レパートリーはきわめて広く、中でも現代音楽の優れた解釈には定評がある。スイスの国際現代音楽協会の会長もつとめた。現在までの作品初演は1,000曲を超えている。

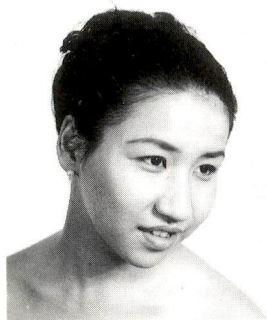
バーゼル歌劇場の常任指揮者をつとめた後、22年間ドイツ・フライブルク音楽大学教授としてオーケストラ指揮者の育成に尽力した。

90年より東京芸術大学の指揮科客員教授として来日。芸大での教育・指揮活動の他にヨーロッパでも引き続き各地で客演指揮を行っている。新交響楽団とは91年より、最近では5月に三宅島音楽教室（東京都主催）、11月にアマチュアオーケストラ・フェスティバル（東京文化会館主催）で共演し、いずれも好評を博した。

●メゾソプラノ

福田 玲子

FUKUDA Reiko



1973年4月20日生まれ。埼玉県出身。
1992年埼玉県立川越女子高等学校卒業。
同年東京芸術大学音楽学部声楽科入学。
現在同大学3年次在学中。
原田茂生、関定子の両氏に師事。

ベートーヴェン交響曲第2番 ニ長調

岡本 明(ヴァイオリン)

Ludwig van BEETHOVEN: Symphony No.2 in D major Op.36 (1802)

— 苦悩を乗り越えた強さと明るさ、ユーモア —

1802年秋。後に「ハイリゲンシュタットの遺書」と呼ばれる有名な書きものを書き終え、青年はこれまでの胸のつかえがすべて下りたような気持ちでハイリゲンシュタットの森を散策していた。

思えば苦しい日々だった。以前からの腸の不調に加えて初めて耳の異常を感じたのは4、5年ほど前だったろうか。そして悪化の一途をたどっている。聞こえないということは音楽家として致命的だ。知られてはならない、隠さねばならない。最近では作曲家としても名が上がって、楽譜の出版にも見通しがついて経済的にも順調になりはじめたばかりだ。大作作曲家への道は開けつつある。近づきつつある栄光と破滅。この矛盾にどうやって耐えればよいのだ。若き日のベートーヴェンの心は悩み続けた。

そんなとき、ピアノの弟子として貴族の令嬢ジュリエッタ・グィチアルディーが入門してきた。彼女は美しく、彼はたちまち恋におちいってしまう。1800年、ベートーヴェン30歳である。有名な「月光」ソナタは彼女に捧げられている。だがそれもやがて破れ、ジュリエッタは貴族の青年と結婚することになる。身分の違いが原因だという。彼の、天才につきものの気難しさ奔放さも原因の一つだったかもしれない。彼が醜男だったせいかもしれない。悪化する一方の耳、思わしくない体調、失恋…。絶望が心を襲い、死の誘惑も何度か押しよせた。しかしあまりにも豊かな音楽を内に持つ彼には死をもってその才能を自ら断ち切るというようなことはできなかった。心の苦悩とは裏腹に、頭に浮かんでくるのはなぜか勇壮な、あるいは明るい曲想ばかりであった。こんなことにくじける自分ではないはずだという気持ちと、天才としてのあふれ出る才能がそうさせたのかも知れない。悩み、苦しみながらも彼は徐々に立ち直っていったようだ。

1802年4月ベートーヴェンはウィーンを後にし、そのすぐ北にあるハイリゲンシュタットに半年間の予定で耳、腸の治療を兼ねて避暑に出かけた。新鮮な空気、太陽の光線、緑の丘、温泉…。半年間の滞在は再出発を期する彼にとって快適であった。だが依然として病弱である。あまり遠くない将来死が訪れるかも知れないと考えた彼はハイリゲンシュタットを去るにあたって「遺書」を書き残した。1802年10月6日のことであった。従ってこれは遺書といっても、すぐに病気で死ぬとか自殺をするとかのためではない。いつ死んでも良いようにというようなものである。内容も愚痴を言ったり弁解をしたり、あまり格調の高いものとは思えない。だが人間ベートー

ヴェンの苦しみ、心のさまがよく表されている。彼はこれを書くことによって自分自身に一区切りをつけたかったのかも知れない。交響曲第2番の作曲はこのような状況の中で1800年頃からスケッチが進められていった。完成時期ははっきりしておらず、ハイリゲンシュタットに行く直前、すなわち1802年初頭に完成されたという説と、ハイリゲンシュタットに行ってから本格的に書き始め、ウィーンに戻る前後、1802年末に完成したという説がある。いずれにしても先に述べたように苦悩と恋の安らぎや悲しみの中でのスケッチ、そして立ち直りの時期での完成であったろう。だがこの作品には苦悩の模様はまったくといってよいほど見られない。力強く明るくユーモアさえある。この間の状況を知るにつれ実に不思議な感じがする。

周知のようにベートーヴェンの交響曲は第3番「英雄」で大きな飛躍を遂げるのだが、第1番、第2番にはまだどこかハイドンのようなところが残っている。第1番と第2番は楽器編成も全く同じで、演奏時間もほぼ同じ。曲の雰囲気も似たところがあって、途中から聞くと1番か2番か迷ってしまうことがある。第1楽章にはともに序奏がつき、やがてアレグロの第1主題に急降下でなだれ込む。この主題も良く似たメロディー構成であるが、比べてみると第1番のそれはいかにもハイドンの、第2番のは明らかにベートーヴェンのものであることが聴き取れるであろう（譜例1、2）。また第2番では第3楽章にスケルツォをおくなどいくつかの工夫をしている（もっとも第1番の第3楽章メヌエットもすでに実質的にはスケルツォであるが）。さらにクラリネット、ホルンの用法にも新しさが見られる。

初 演：1803年4月5日アン・デア・ウィーン劇場にて、ベートーヴェン自身の指揮による。このとき交響曲第1番の再演、ピアノ協奏曲第3番初演（ピアノ：ベートーヴェン自身）が一緒である。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

Adagio molto Allegro con brio 譜例1



Adagio molto Allegro con brio 譜例2



ドビュッシー：海— 3つの交響的素描

上原 誠(打楽器)

Claude Achille DEBUSSY: La mer – Trois esquisses symphoniques

ドビュッシーが生まれた1862年頃、音楽界はまもなく訪れる20世紀からさらに第2次世界大戦以降の、いわゆる現代音楽に向けての兆しが少しずつ芽生え始めていた。彼の2年前にはグスタフ・マーラーが、そして2年後にはリヒャルト・シュトラウスが、さらにその2年後の1866年にはエリック・サティといった音楽を次の時代に導いた人達が生まれている。そして忘れてはならない出来事として1865年の『トリスタンとイゾルデ』の初演があげられる。ロマン派音楽が飽和点を迎えつつある中、とりわけ巨大な存在だったヴァーグナーの「トリスタン和音」と呼ばれる半音階的に次々と転調を展開していく技法は、それまでの調性の概念を極限まで追いつめるものだった。当時の音楽家にとってヴァーグナーを無視することは不可能であり、ドビュッシーも若い頃はバイロイトに詣で、その作品を全曲暗譜で弾くほどの熱烈なワグネリアンだったが、メーテルリンクの『ペレアスとメリザンド』に接し、約10年をかけてオペラに仕立てあげることによって、フランス人としての独自のスタイルを確立した。もとより生粋のフランス人であるドビュッシーにとって、1871年の普仏戦争を持ち出すまでもなく「宿命の対決」的関係にあったドイツ人の音楽は（作曲技術は別として）肌に合うはずもなく、加えてロマン派の音楽を体質的に受け付けなかったこともあり、やがて反ヴァーグナー派の旗頭となっていった。

若い頃からヴェルレーヌ、ジイド、モネといった様々なジャンルの芸術家たちと交友し、生来の細やかな感性に磨きをかけ、幅広い教養を身につけていったドビュッシーにとって折から芸術全般にわたって広まっていた世紀末の風潮は十分に刺激的だったに違いない。芸術の拡大を求めて他のジャンルとのクロスオーバー、先祖帰り、異国趣味などが試みられていたが、これらはロマン派を越えて次なるものを模索していた音楽にとっても、魅力あるテーマだった。先の『ペレアス』においてグレゴリオ聖歌の古い旋法を、同じ頃に作曲された『パンの笛』という歌曲（『ビリティスの3つの歌』より）ではギリシアの古い旋法を取り入れるなどの試みは、ヴァーグナーの極限を突き抜け、20世紀の音楽の特徴のひとつである「調性の崩壊」を導く確かな道を拓くものとなった。

ところで今回演奏する『海』は葛飾北斎の「富嶽三十六景」のなかの「神奈川沖浪裏」——「怒濤逆巻く」と言うにはあまりにも巨大な波に翻弄される小舟、そして

小さく遠望する雪を被った富士山——に啓示を受けて作曲されたといわれている。

1860年頃フランスで興った印象主義は、美術におけるルネサンス以来の大改革とされる。色彩と光に関する学術的な究明に加え、技術の進歩により文字通り多彩な絵具が作られるようになり、画家たちは太陽の光を受けて刻々と変化する身の回りの風景の美しさを表現する喜びを見出した。さらに同じ頃初めてフランス人が目にした浮世絵は、大胆なデフォルメ、思いも及ばなかった視点、西洋の遠近法とは全く異なる表現など、その構図法はいかにも新鮮であり、印象主義の確立に大きな影響を与えた。自分の目で見、心に感じ取った印象を思うがままに表現していくことは、それまでの権威主義的で肩肘張った宗教画や神話画とはかけはなれた自由の気風に満ち溢れたものだった。

ヴァーグナーの巨大な影に対抗し、交響曲に代表されるドイツ音楽の「権威」にも背を向けていたドビュッシーにとって、美術方面の交友からもたらされたこの波に、我が意を得たりという面持ちであったろう。彼はこの北斎の絵から海という風景ゆえにではなく、その構図法を目からウロコが落ちる思いで受けとめたに違いないと私は思っている。

今では『海』は印象主義音楽の代表的傑作とされているが、それ以上にドビュッシーが『牧神』、『ペレアス』、『海』などの作品を世に送り出すことにより、それまでの音楽の枠を解き放ち、20世紀に向けて無限の可能性を切り開いた功績はもっと評価されてよい。

曲は「3つの交響的素描」という副題の通り、標題のついた3つの曲からなっているが、「素描」といっても海を見ながらではなく、フランスのほぼ中央部のブルゴーニュ地方で作曲された。これについて彼は「大洋がブルゴーニュの丘の斜面を洗うものかとあなたはおっしゃるでしょうが、私には数えきれない記憶があります。私の感覚には現実よりもその方が良いのです」と語っている。

今日あなたがこの曲をお聞きになり、記憶の中の海を思い興していただけるだろうか。

初 演：1905年10月15日ラチーラー楽団により。

楽器編成：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、コールアングレ1、クラリネット2、ファゴット3、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ、シンバル、タムタム、大太鼓、グロッケンシュビール、トライアングル、ハープ2、弦楽5部

ファリャ：舞踊音楽「三角帽子」(全曲)

松本 リリ(ヴァイオリン)

Manuel de FALLA: El Sombrero de tres picos

馬蹄形アーチや細工が施された壁面が印象的なアルハンブラ宮殿は、キリスト教徒によるレコンキスタ（国土回復運動）でイスラム勢力が滅ぼされ、最後に残ったナスル朝の宮殿である。一時期、この美しい宮殿のあるグラナダの街を愛し、居を定めたこともあるファリャは、この街から西へ250kmの小さな港町カディスが生まれ故郷である。

幼いころからピアニストであった母からピアノを学び11歳の時にはカディスの聖フランシスコ教会で母と連弾したこともある。やがてマドリードへ行き、作曲家になりたいとフェリーペ・ペドレルに師事した。当時のスペイン人による作曲活動は〔サルスエラ〕のような喜劇に限られている状態だった。彼はペドレルからスペイン音楽の復興を教えられ、その道に進もうと決意した。1907年から7年間パリに滞在し、貧しい生活でありながらも、精神的には充実した日々で、ドビュッシー、デュカス、ラヴェルらと交友関係があった。

彼の音楽の原点は、やはりジプシーの歌と踊りが根づいたアンダルシア地方にある。実際にジプシーの音楽の調査をして著した本『エル・カンテ・ホンド』も出している。しかし、先輩のアルベニスやグラナドスが民族音楽をほぼそのままの姿で使ったのに対し、ファリャはその旋律やリズムを生み出した民衆の精神や気質の精髓を生かした音楽を作った。

この《三角帽子》は前作《恋は魔術師》をロシアバレエ団の主宰者セルゲイ・ディアギレフが見て感動し、その依頼により作曲されたものである。基になったのは、写実主義作家のペドロ・アントニオ・デ・アラルコン（1833-91）によって1874年に書かれた、アンダルシア地方の民話をもとにした中編小説『三角帽子』である。この帽子はバレエの登場人物の代官がかぶっているもので、権力の象徴となっている。舞台装置と衣装をパブロ・ピカソが手掛けた初演は1919年にロンドンで行われ、大成功をおさめた。

この曲には地方色豊かな曲が含まれているが、それを簡単に挙げてみよう。「粉屋の女房の踊り」にあ

るファンダンゴはアンダルシア地方の民謡及び舞踏で、18世紀ごろより伝わるこの曲はフラメンコ音楽の代表で、通常は1対の踊り手がカスタネットを奏し、ギター伴奏がつく。「近所の人たちの踊り」にあるセギディリャはアンダルシアの大衆的なダンスでボレロよりももっと速い3拍子。「粉屋の踊り」のファルーカはアンダルシア地方の舞曲でギター伴奏の4拍子。そして、「終幕の踊り」のホタはスペイン北部の舞踏で、急速な3拍子。ギター・バンドゥリア・カスタネットなどで伴奏される。

歌詞は次の通り。

《Introducción 前奏曲》

Casadita, Casadita,
cierra con tranca la puerta;
Que aunque el diablo esté dormido,
¡a lo mejor se despierta!
ほら、可愛らしい奥さん
かんぬきでしっかり戸締りを
寝ているはずの悪魔は
起きているかもしれないから！

《Danza de la molinera 粉屋の踊り》

¡Por la noche canta el cuco
Advirtiéndolo a los casados
que corran bien los cerrojos
que el diablo está desvelado!
Por la noche canta el cuco—
¡Cucú! ¡Cucú! ¡Cucú!
闇夜にカッコーが鳴く
家々の主人に告げるために
しっかりかんぬきを掛けて
悪魔は眠っていないよ！
闇夜にカッコーが鳴く
カッコー！ カッコー！

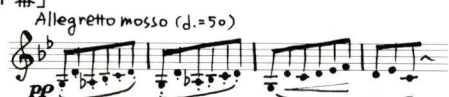
初 演：1919年7月22日ロンドン、アルハンブラ劇場

楽器編成：フルート2（ピッコロ1）、オーボエ2（1番はコールアングレ持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ハーブ、チェレスタ、ピアノ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、木琴、グロッケンシュピール、タムタム、カスタネット、弦楽5部、メゾソプラノ独唱

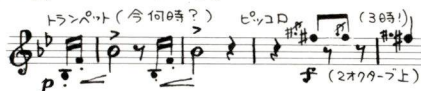
●三角帽子——場面解説

まず前奏。ティンパニに乗って金管楽器が劇の始まりを告げる。カスタネットと手拍子、オレ！オレ！の声。やがて歌。歌詞は前頁参照。

[第1幕]



スペインのグラナダに粉屋とその美しい妻が仲良く暮らしていた。水車小屋に向かう小径には葡萄が実り、井戸の周りにはたくさんの花が咲いている。隅には黒い鳥が入った鳥籠。水車小屋の壁には時計。背後には小径に通じる橋がかかっている。



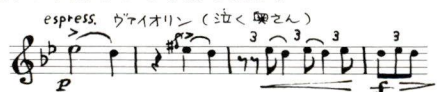
粉屋が籠の黒い鳥に「いま何時？」と問いかけると鳥は3回鳴いて答える。3時だよ。粉屋は怒り、デタラメ言うな何時だ。鳥「4時だよ」。これを見ていた奥さんは、しょうがないわねと鳥に葡萄を1粒。鳥は2時、と正しい時間を答える。やはり奥さんの方がうわてである。ダナは庭に水をやり、奥さんは鳥に餌。



ちょっとした伊達男が水車小屋の前を通りかかった。こんにちは。奥さん本当にお美しい、とお辞儀。奥さんもウフフと応える。粉屋はこれを見て「念のため言っとくがおれの女房だぞ！」



お代官様のエラそうな行列が近づいてくる。奥方とお付きの者を従えている。粉屋夫妻はお辞儀。代官が落とした手袋を粉屋の奥さんが急いで手渡すと、代官はその美しさにドキ。むらむらと沸き上がってしまった代官だが、奥方の手前なので平静を装う。



粉屋は粉屋で道行く娘に投げキスをしてニコニコ。奥さんは怒って、しまいには泣き出してしまう。粉屋はあわてて、そんなつもりじゃあ…お前だけだよ云々と慰める。



突然足音。あいつ戻って来やがったな、スケベめ。どういうつもりか見届けてやるわい、と粉屋は妻に促されて木の陰に隠れる。



何も知らないかのようにファンダンゴを踊る奥さん。代官は警官を従えて近づいて来る。



奥様こんにちは。代官は、初めて気づいたように顔を向けた粉屋の奥さんに膝をついて挨拶。まあ、こんなところに？ 光栄ですわ。代官はなぜか疲れて苦しうにしているので、奥さんは葡萄の葉っぱであおいでやる。



奥さんが葡萄の房を持って代官に近づくと、代官はそれを口にくええようとしてニジリ寄り。奥さんは後ずさり。代官はガルルルと追いかけるがヒラリと身をかわす奥さん。そのうち代官はつまずいて転び、ドンガラガラという音に粉屋が棒を持って泥棒め！と飛び出してくる。奥さんは「代官様が滑られて……」

そうでしたか、それはそれはと粉屋は代官を起こす。やがて夫妻の筋書きに気づいた代官は怒り、覚えておれとばかりに退場。



代官が出ていくと粉屋夫妻はやったやった、と大喜び。ところが陰険な目つきでこちらをうかがう警官に気づいた2人は一転して沈んだふりをする。



警官が見えなくなると2人はまたファンダンゴを踊る。

[第2幕]



聖フアンの祝日の夜、近所の人たちが祝宴に集まり、みんなで踊っている。



奥さんはみんなが集まってくれたことを感謝し、夫にみんなのために踊るよう頼む。ホルンが踊りの開始を宣言する。



よしきた。粉屋の踊り。ファルルカという踊りである。あとはみんなで飲めや歌えの大賑わい。



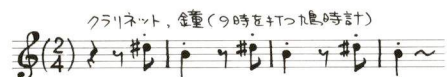
そこへ突然ノックの音。「運命」のモチーフである。粉屋がドアを開けると黒装束の警官が立っている。



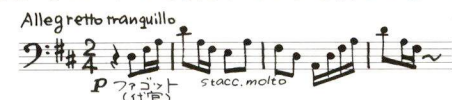
なぜだどうしてだ!と抗議するが、どんどんひっ立てられていく。追いつがる奥さん。村人はかかわりを恐れて次々と去ってしまう。



ひとり取り残された粉屋の奥さん。悲しく歌う部屋の中 (歌詞は前々頁参照) どこかでカッコウの声。



やがて鳩時計が9時を打つ。不安な奥さんは鉄砲を持って寝室へ。カーテンを引き、明かりを消してまっ暗闇。



また性懲りもなくこっそりと現われた代官。臆病に震える足をなだめながらも着実に奥さんの寝室ににじり寄る。付き添う警官に「ちょっとあっちへ行ってろ」。



代官はドンファン気取り。手鏡でちょっとスカーフを直して、さてさて。



ところが月が雲に隠れて足元が見えなくなり、渡ろうとした橋からまっ逆さまにドボン。物音に気づいた奥さんを見るとズブ濡れの代官が立っている。怒り心頭の奥さん。出て行って!



代官はひざまずいて格好をつけ、「お願いだ聞いてくれ」。しかし激怒中の奥さんは彼に鉄砲を突きつける。撃つな撃つなとあわて、震える代官。ところが奥さんも恐くなって逃げ出してしまふ。びしょ濡れで寒い代官は服も三角帽子も脱いでベッドにもぐり込む。



そこへ警官の手を逃れた粉屋が戻ってくる。よしよし追って来ないな。部屋を見渡すとベッド脇の椅子に代官の服。なんてことだ!



腹を立てた粉屋は殺してやるぞと思いつつ、悪魔的ないい考えを思いついた。粉屋は炭のカケラで壁にこう書く。「代官様、私はこれから復讐に参ります。代官夫人も美人ですね」

代官の服を着て、口笛を吹いて出ていく粉屋。



カーテンの陰からおそろおそろ出てきた代官は壁の文字を読み、大変だ!と自分の服を着ようとするが、どこにもない。しかたなく粉屋の服を着て歩き回る。

[フィナーレ]



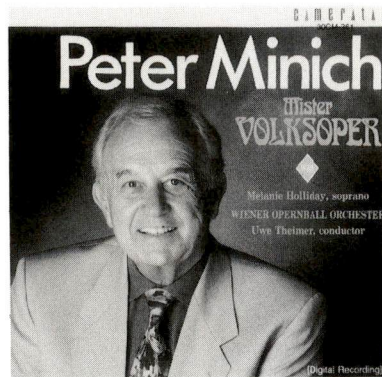
逃げた粉屋を追って来た2人の警官は粉屋の服を着た代官を見つけて飛びかかり、首を絞める。争っているところへ近所の人々が集まってきた。そこへ今度は代官の服を着た粉屋。

一瞬何が起ったのがわからないが、すぐに助平オヤジの正体が割れ、群衆はホンモノの代官をなぶりものに。みんなにもみくちゃにされる代官。粉屋夫妻は誤解が解けて和解する。めでたしめでたし。

*この頁の構成にあたり、指揮者のフランシス・トラヴィス氏のご厚意により参考文献をご提供いただきました。

ペーター・ミニツヒ

『ミスター・フォルクスオーパー』



ウィーン・オペレッタの
粋を極めた、
名歌役者ミニツヒの
初CD・ソノアルバム。

絶賛発売中

あのダニロやヒギンズ博士は今も健在!!

絶賛発売中



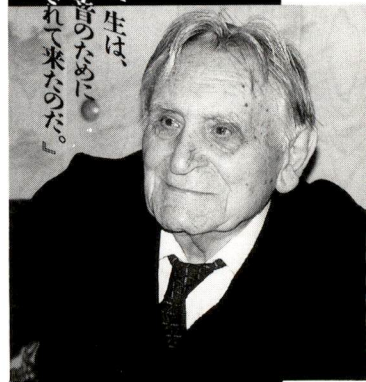
この美声で歌う甘美なメロデーの花束。
『ウィーンをこめて』

カルチコスキー・オペレッタ名唱集

「ジテイト」/「ロサの皇太子」/「メリー・ウイドウ」/
「ほろろの国」(トリル)
「伯爵令嬢の夜」/「チャルターシュの女王」(カレン
「ヴェニス一夜」/「ウィーン氣質」/「シュタウス
より13曲」/「マリキ」(トリル)
リシャード・カルチコスキー(テノール)
メリー・ホリデイ(ソプラノ)
ウヴェ・タイマー指揮/ウィーン・オペラ舞踏会管弦楽団
[CD] 32CM 221 ¥3,008 (税込)

レナール:マキシムの歌 ■王子と女王の物語 ■唇は語らずとも「メリー・ウイドウ」/
この幸せが夢であつても「エヴァ」/ふたが愛し合つていれば「いけいけ屋小僧」
カールマン:ウィーンによろしく ■もう一度踊りたい「伯爵令嬢マリツァ」/
好きになるのはよあるが「チャルターシュの女王」/軽騎兵マーチ「サーカス紀殿下」
O. シュタウス:静かに静かに、そよ風の吹く庭で「ワルソ」の夢
シーチンスキー:ウィーンが夢のまち
ロウ:あの娘が忘れられない ■スペインの雨「マイ・フェア・レディ」
ポーター:ベトルーキオの歌 ■ワンダーババ「キス・ミー・ケイト」
ペーター・ミニツヒ(テノール)
メリー・ホリデイ (ソプラノ)
ウヴェ・タイマー指揮/ウィーン・オペラ舞踏会管弦楽団
[CD] 30CM-361 ¥3,090 (税込)
★デジタル録音:1994年6月、ウィーン/1994年1月、東京

「私の一生は、
この録音のために
準備されて来たのだ。」



＜アイヒホルン追悼・特別企画＞
巨匠が最晩年に残した全CDを集大成。超お買得アルバム一、〇〇〇セット完全限定!!
ブルツクナー! 交響曲選集
「第二」(2種)「第五」「第六」「第七」「第八」「第九」(ライナー付)
「CD」20CM 381 ¥3,899 (9枚組) ¥18,540 (税込)
★デジタル録音'90年4月・'94年3月、リンツ・ブルツクナー管弦楽団

絶賛発売中

『ウィーン情緒』&『宵の明星』
ウィーン・ビーダーマイヤー・ゾリステン



ランナー/
シュタウス I /
ファールバッハ II
(全16曲)
[CD] 32CM-210
¥3,008 (税込)

『シェンブルンの人びと』&『モーツァルト』
ウィーン・ビーダーマイヤー・ゾリステン



ランナー/
シュタウス・ファミリー/
メーセン
(全11曲)
[CD] 32CM-243
¥3,008 (税込)

『麗しのウィーン・リート名曲集』(全19曲)
ウィーン・ビーダーマイヤー・ゾリステン



ゲリンデ・イェリネック
(ソプラノ)
フリッツ・レーマン
(テノール)
フーベルト・イェリネック
(ビーダーマイヤー・グループ)
[CD] 32CM-306
¥3,008 (税込)



『ウィーンっ子たち』

ウィーン・ビーダーマイヤー・ゾリステン

ヨハン・シュトラウス I: 平和の使い / 舞踏会の夜 / 賛美のワルツ
ヨハン・シュトラウス II: 証券取引所から / ウィーン女性
ヨーゼフ・シュタウス: ウィーンっ子たち / 翔んでるポルカ / 大騒ぎのポルカ /
貸し方・借り方 / ウィーンのポルカ / あこがれ
エドゥアルト・シュタウス: みつばち、ツィーラー: 名案あるかな? / 放し!
ファールバッハ II: ヨーゼフ・シュタウスの想い出
ウィーン・ビーダーマイヤー・ゾリステン
[CD] 30CM-357 ¥3,090 (税込)
★デジタル録音:1994年6月、ウィーン

シュトラウス・ファミリーを中心に、
コントラバスを加えた
オリジナル・スタイルで、
ワイン・グラスを傾け、
本場ウィーンの最高級
ホイリゲに遊ぼう!



最新発売

素朴で親愛な19世紀オーストリア庶民の音楽

残り
僅少



camera
カメラータウキョウ

音楽のある幸せ、
届けます。



この先もずっと、音楽のある幸せが
続いてほしい、と思います。
誰もが手軽に、音楽を楽しめるように。
つくる人も安心して創作活動に
専念できるように。
JASRACは著作権の管理を通して、
音楽の未来を守っています。

JASRAC

日本音楽著作権協会

〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)3502-6551